Osaka University Knowledge Archive

Title	スウェーデンの非営利セクターと福祉に関する研究 : その変遷における意義と役割
Author(s)	吉岡, 洋子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47182
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	吉　岡　洋　子（よし おか よう こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２０８０８　号
学位授与年月日	平成 19 年３月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**スウェーデンの非営利セクターと福祉に関する研究－その変遷における意義と役割－**
論文審査委員	（主査） 教　授　堤　　修三 （副査） 教　授　中村　安秀　　助教授　斉藤　弥生

論　文　内　容　の　要　旨

本研究は、スウェーデンの非営利セクターの歴史と現状を検討し、福祉国家との関係におけるその位置づけや役割を明らかにすることを目的とする。スウェーデンは従来、普遍型福祉国家の典型として、その公的制度や施策が注視されてきた国である。一見、国家独占ともみえる福祉システムでの非営利セクターとは一体、どのような存在なのか？本研究では、スウェーデンという国を非営利セクターの側面から捉え直すことで、福祉国家や非営利セクターに関する議論に一つの示唆を与えることを試みている。なお、研究方法としては、スウェーデンでの留学期間を含むフィールドワークと、原語の一次資料を中心とする文献研究を用いた。以下、各章の概要を述べる。

１章では、今日世界的に高まっている非営利セクターへの関心と期待の背景、および非営利セクターに関連する用語と概念の定義を中心に述べた。高度経済成長終焉後、1980 年代頃から非営利セクターのインパクトが世界的に注目されるようになり、経済学、社会学、政治学など多様な領域からその意義や役割が論じられている。福祉分野では、非営利セクターがアドボカシーとサービス供給という主に二つの役割を担いつつ、福祉の公的責任を拡大させてきた歴史がある。しかし、非営利セクターに関する研究は歴史も浅く、福祉多元化の潮流等を背景に今日高まっている議論においても不明確な点が多いことがわかった。

２章では、スウェーデンの非営利セクターの全体像と現状を描いた。従来は脆弱な存在として固定観念的に捉えられていたが、1990 年代以降に研究が活発化するなかで、スウェーデンの非営利セクターの特徴が次第に明瞭化されてきた。例えば、セクターの経済規模は諸外国と同等であること、活動分野としては、保健福祉分野が活発な諸外国と異なり、文化・レクレーションや労働組合が盛んであることなどがわかった。また、法的形態や用語のニュアンスについても、スウェーデンの NPO の特徴を浮き彫りにした。

３章－６章では、特に高齢者福祉分野に限定して、福祉分野におけるスウェーデンの非営利セクターをより具体的に論じた。歴史的背景から、「伝統的なアドボカシーの役割」（３、４章）と「1980 年代以降に新たに見られるサービス供給の役割」（５、６章）に区分し、それぞれ、社会背景や理論的枠組み（３、５章）と、現地での実態調査（４、６章）の両面から取り上げた。

３章では、スウェーデン型福祉国家の基本的特徴と重ね合わせながら、スウェーデンの NPO の伝統的なアドボカ

シー役割の成立背景を明らかにした。スウェーデンでも 20 世紀初頭までは NPO が慈善的な福祉活動を担っていた。しかし、1930 年代頃から、コミューンを核とする包括的・普遍的な福祉が特徴のいわゆるスウェーデン型福祉国家が目指され、福祉サービスの供給は国家の範疇へと急速に移行した。福祉分野の NPO は「国民運動（folkrörelse）」の要素を色濃くもつアドボカシー活動を活発に行い、福祉国家を下支えするようになった。高福祉高負担のスウェーデン型福祉国家は、そのレジティマシー確保のためにも各種の参加を重視する。そのなかで NPO は、主に、民主主義の学校また民主主義のチャンネルとして認識され、今日に至っていることが明らかになった。

４章では、スウェーデン型福祉国家モデルの特徴を今日に残す典型的な地方都市ヴェクショー市で行った現地調査をもとに、高齢者福祉関連の NPO 活動とその行政との関係について述べた。NPO の実態調査、行政職員へのインタビュー、行政資料調査、の三種類を実施した結果、福祉国家の補完としてのアドボカシー活動や組織形態等、スウェーデンの非営利セクターの典型的な特徴が顕著にみられた。他方、一部の NPO が施設訪問などより直接的な活動を開始していたり、新形態の団体が誕生していたりと、1990 年代以降の新たな動向も確認された。行政も、近年になり NPO との公式的な関係や連携を顕著に求め始めていた。こうした結果を、本章では福祉国家の変遷過程と照合して考察を行った。

５章では、1980 年代以降のスウェーデンの高齢者福祉に関連する種々の変動のなかで、特に福祉サービス供給の民営化・多元化の動向に注目した。今日的な社会背景において、非営利セクターに対しても、民主主義の学校という伝統的観点にとどまらず、福祉サービス供給や行政との連携相手としてなど新たな視線が向けられつつある。NPO の福祉サービス供給については、公的責任の減退を危惧する反対意見も大きいが、ソーシャルエンタープライズの観点からその利点に注目・期待する立場も一部に見られることがわかった。

６章では、高齢者介護サービス事業者としての非営利セクター組織に対して、福祉多元化が最も進む首都ストックホルムで実施したヒアリング調査について述べた。４事業者（移民組織、職員協同組合、住宅協同組合を母体とする株式会社、財団形式の慈善団体）を対象とし、それらが組織の内外にもたらす効果や貢献を具体的に確かめた。調査の結果、組織内部では職員の自由度と働きがいが増したり、利用者にとって介護サービスが通常の社会生活と密接につながったりという利点がみられた。また、組織外部に対しても、行政や他の NPO への大きな刺激となっていることが確認できた。こうした結果をソーシャルエンタープライズの概念と関連付けて分析し、その貢献を可能にする要素を検討した。

７章では、前章までを総合的に踏まえた考察を行った。スウェーデンの非営利セクターには今日、かつてのアドボカシー中心の役割に加えて、サービス供給主体の役割を新たに担い社会貢献する姿も見られつつある。つまり、公的福祉制度が発達した社会においても、非営利セクターは虚弱な存在に陥るのではなく、その先駆性を発揮して公的セクターに刺激を与え、福祉国家の修正を導く役割を果たしているものと考えられる。今後、国家と市場といった二項対立軸では現代の諸問題が解決されないことはますます明らかとなっている。そのなかで、非営利セクターの実践は問題解決の糸口を示す存在として意義を増すであろうことが展望された。

以上のように、スウェーデンの非営利セクターは、各時代の社会状況や福祉国家の変遷に伴って柔軟に変化しつつも、常に先駆性を発揮していた。従来、普遍型福祉国家の典型としてその公的制度や施策が注目を浴びてきたスウェーデンの福祉においても、非営利セクターが重要な役割を果たし続けていることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨

本論文「スウェーデンの非営利セクターと福祉に関する研究」は、スウェーデンの非営利セクターの意義と役割の変遷・また福祉国家との関係を分析、考察したものである。

１章および２章では、非営利セクターをめぐる今日的議論を理論的に検討した上で、先行研究を用いて、スウェーデンの非営利セクターの特徴を明らかにした。

３章および４章では、スウェーデンの高齢者福祉分野における非営利セクターの伝統的な役割と意義について、関連団体への丁寧な調査を行うことにより明らかにした。

さらに５章と６章では、90 年代以降、福祉サービスの民間委託の影響を受けて、新たなに登場したソーシャルエンタープライズ（社会的企業）の活動実態について、現地調査を行い、その社会的意義を分析し、考察した。

以上のような研究調査の中から、７章では、スウェーデンの高齢者福祉における非営利セクターの役割は、福祉国家の機能に取って代わるというものではなく、むしろ利用者の声をより活かした福祉サービスづくりに貢献している点を指摘し、結論づけた。

スウェーデン福祉研究では、従来から公的セクターの機能と役割に関心が集中してきたが、本研究は、非営利セクターに焦点をあててスウェーデン福祉国家の現状を捉えようとする点が独創的であり、従来の研究が未着手であった領域の開拓に貢献したといえる。

また本論文には、申請者のスウェーデン語運用力を生かした現地の一次資料が豊富に用いられており、また留学期間を含むフィールドワークも生かされており、この点でも高く評価できる。

以上の理由により、本論文が博士論文として十分な水準にあると判断された。